

東京から

東京文化資源会議●座談会記録集 二〇二四・〇五

ジモトを

逢坂裕紀子／菊地映輝／サム・ホールデン／沢辺均／三文字昌也／庄司昌彦／中島伸／坪田華／宮崎晃吉／柳与志夫

つくくる。

① これからの東京で何ができるか

② 東京の文化資源を活用したこれからのまちづくり

① これから 東京で何 ができるか

日時：2023年5月5日(金) 15:40～17:05
場所：御茶ノ水ソラシティカンファランスセンター ルームC
形式：シンポジウム(一般公開)
座談会出席者(6名、敬称略)

●逢坂祐紀子
国際大学GLOCOM研究員

●菊地映輝

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター主任研究員・講師

●サム・ホールデン

一般社団法人せんととうとまち理事

●沢辺均
ポット出版

●庄司昌彦

武蔵大学社会学部教授

●宮崎晃吉

(株)HAGISO代表取締役、建築家

●柳与志夫

東京文化資源会議事務局長

●庄司昌彦

武蔵大学社会学部教授。武蔵学園データサイエンス研究所副所長。

1976年生まれ。東京都葛飾区出身。デジタル庁オープンデータ伝道師、総務省地域情報化アドバイザー、総務省「情報通信白書」アドバイザーボードなど、政府の委員等も務めている。東京文化資源会議では広域秋葉原作戦会議プロジェクト座長。著書(共著)は『インターネット・オブ・プレイス「都市」の新しい拡張』(東京大学出版会・2023)、『入門メディア社会学』(ミネルヴァ書房・2022)ほか。

●中島伸

東京都市大学都市生活学部・同大学院環境情報学研究科准教授／都市デザイナーアーバンデザインセンター坂井副センター長、千代田区神田警察通り沿道整備推進協議会神田警察通り周辺まちづくり検討部会長、東京文化資源会議トーキョートラムタウン構想座長などを兼任。1980年東京都中野区生まれ。専門：都市デザイン、都市計画史。

著書：『時間の中のまちづくり 歴史的な環境の意味を問い直す』(鹿島出版会・2019)『図説都市空間の構想力』(学芸出版社・2015)ほか

●坪田華

UR都市機構 東日本都市再生本部 都心業務部事業推進1課

宮城県出身。東日本都市再生本部 都心業務部にて日本橋横山町・馬喰町担当。まちの個性を活かす街づくりをモットーとし、問屋街特有の街並みを活かすリノベーションを取り入れた街づくりに取り組む。まちの交流スペースとしてUR保有地1号(イベントスペース『+LOBBY』)、横山町にてURが初めてリノベーションに取り組んだ2号(建築設計事務所『ソラビル』)をオープン。現在新たなリノベーション物件をオープンさせるべく日々奮闘中。

●宮崎晃吉

(株)HAGISO代表取締役、建築家。

群馬県前橋市生まれ。2008年東京藝術大学大学院修士課程修了後、磯崎新アトリエ勤務。2011年より独立し建築設計やプロデュースを行うかたわら、2013年より、自社事業として東京・谷中を中心エリアとした築古のアパートや住宅をリノベーションした飲食、宿泊事業を設計および運営している。hanareで2018年グッドデザイン賞金賞受賞/ファイナリスト選出など。

●逢坂祐紀子

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター研究員。

「しのばず文化情報活用プロジェクト」(東京大学情報学環)、「番付データベース」「書画家人名データベース」(国立文化財機構東京文化財研究所)、「図書館デジタル・アーカイブ」(東京大学文書館)等の実務経験を通じて、デジタル化されたデータの知的所有権や公開をめぐる「秩序や合理性」「当事者の論理」に関心を持ち、社会学的観点から研究している。

●菊地映輝

武蔵大学社会学部准教授。座談会出席時は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター主任研究員・講師。

1987年、北海道生まれ。博士(政策・メディア)。2017年、慶應義塾大学大学院後期博士課程単位取得退学。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院研究員などを経て、2019年より国際大学に着任。専門は文化社会学、情報社会論等。株式会社Lab.808代表取締役、一般社団法人メタ観光推進機構理事、コンテンツツーリズム学会理事を務める他、東京文化資源会議では広域秋葉原作戦会議にて活躍。

●サム・ホールデン

翻訳家、文筆家、一般社団法人せんととうとまち理事。

アメリカ出身、2006年に初来日し、2014年より東京在住。東京大学大学院都市社会学修士課程修了。ライター、翻訳家として活動しながら、赤坂の「トーキョーリトルハウス」、滝野川の「稲荷湯長屋」、広島県尾道市の「迷宮堂」などの古民家再生に携わる。

●沢辺均

ポット出版代表。

1956年東京生まれ。1987年にデザイン事務所を立ち上げ、その後1989年にポット出版を設立。1999年、出版社5社で版元ドットコムをつくり、書誌・書影情報のデータベース化、ウェブサイトでの公開、書店・取次など業界各所への自動転送、実売情報のデータベース化などに取り組む。

●三文字昌也

都市デザイナー。合同会社流動商店 共同代表、一般社団法人せんととうとまち理事。東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士後期課程。

1992年神奈川県生まれ。各地で都市デザイン・計画の業務を行うかたわら、日本や台湾の都市生活施設を対象とした学術的研究等に取り組む。

「それぞれの「ジモト」に根差した活動について

柳

東京文化資源会議の吉見会長による基調報告「新東京ビジョンは何をめざすか…新しいジモトの創造」を基盤に議論をしていきたいと思います。司会は、東京文化資源会議関係でご協力いただいているポット出版の沢辺さんをお願いしています。

沢辺

地元（渋谷区神宮前）で商店会の役員もしている、沢辺と申します。

吉見会長の基調報告（第1章参照）でご説明いただいた「吉見ジモト論」をたたき台に、パネルディスカッションを行います。本日は、東京の文化資源に関して様々な活動をされている方、関わりを持たれている方、研究をされている方を5名お招きしています。

はじめに、東京文化資源会議との関わりを含めた自己紹介と、本日の「吉見ジモト論」に対するご意見を順番にお願いします。

庄司

武蔵大学社会学部の教員をしています、庄司と申します。東京文化資源会議では、広域秋葉原作戦会議プロジェクト（以下、「秋葉原チーム」）を担当しています。秋葉原の変化は周辺際からやってくるということで、今日はお茶の水↓秋葉原↓浅草橋方面へとまち歩きをしてきました。こんなことをしています、情報社会論の研究者として、情報化が進む中でまちや地域がどう変わっていくのかに関心を持っています。

そういう意味では秋葉原はおもしろい場所で「家電のまち↓コンピューターのまち↓コンテナのまち」へと変化していき、物がネットで買えるようになると今度は「体験のまち」になってきました。しかしコロナ禍以降、密を避けるため人が小さな箱に集まりにくくなりました。秋葉原はいろいろと転換を迫られている場所だと考えながら、歩いてきました。

私は、まちの中心は移動するものだと思います。歴史的にも、秋葉原は周辺のまちと

の関係のなかで中心が動いている。そういう意味で、吉見会長のおっしゃるように昭和通りの高速道路を取り払ってみたらどうかと思っています。高速道路を残して自動運転の実験をするといったことも魅力的ですが、もっとラジカルに逆開発をしたい。例えば、秋葉原に今一番似合わない「土の匂い」を持ってきた時に、デジタルコンテンツとの組み合わせで何が起こるか。そんなことを考えたいと思いました。

また、吉見会長の資料の前半に、「東京には、東京デイズニールランド以外に大衆的な観光地が少ない」と書かれていました。たしかに今、インバウンドが戻ってきて渋谷や浅草は外国人・観光客だらけになり、観光客による公害（オーバーツーリズム）が発生しています。大衆的観光地をつくっていくと地元民の生活ができなくなるだけなので、あまりそういうことをやらない方が良いのではないかと、むしろ、地元民の生活空間で少数のお客さんが共存できる観光地化を考えられないかと思っています。

宮崎

宮崎晃吉と申します。出身は群馬で大学から上京し、当時、谷中にある「萩荘」というアパートに住んでいました。そのアパートは東日本大震災を機に取り壊される予定でしたが、最後に葬式をしてあげようとアートイベントを実施したところ、大家さんの気が変わり、資金を出し合って改修し、「HAGISO」として運営することになりました。現在、運営を始めて10年ほどになります。「最小文化複合施設」という名前で始めたこともあってか、東京文化資源会議にもお声かけいただき、以来、つかず離れずの感じで時おり顔を出しています。

今日の「ジモト論」という中でお話をさせていただくと、私は群馬出身で、妻は中国出身。妻は4歳の頃から日本にいますが、国籍は中国のままです。このように、基本的には部外者として谷中に関わり始めて15年ほど住み、「HAGISO」の他にも偶然が続いて、現在は7拠点ほどまち中の空き家を直しては運営してという感じで活動しています。

谷中がおもしろいのは、お店ごとにテンションも、そこに集まる常連さんも全然違うことです。徒歩圏内でも、例えば、「西日暮里スクランブル」という店の中にある飲み屋「NIGHT KIOSK」によく来る人と、「HAGISO」に来る人と、定食屋の「TAYORI」に来る人は全然違います。同じまちに暮らしていても、これだけ属性の違う人たちがいるのが非常におもしろく、多拠点でやっているからこそ、一つの地域や都市に対して触手を伸ばす神経回路のような感じが生まれ、運営している意味は多少あるのかもしれないと思っています。

最初は、これらの店を同じ会社が運営していることを声高に言わなかったのですが、最近では他のお店のお客さんを別のお店に連れて行くような試みをしています。レイヤーがたくさんあることは分かってきたので、そこを混ぜるとどんなことが起こるのかを考えています。

「部外者としてのジモト感」ということ以前に今、私が感じているのは、地域内になりに多様なレイヤーがあるということです。私自身、地域内で商売をしながら、町内会の役員として地元の中核の人たちと関わり合いつつ、子どもの小学校のPTA、子どもクラブ等とも関わっています。私たちが知らないレイヤーもたくさんあるでしょうし、それを縦割りと呼ぶよりは、むしろ多様なレイヤーがあること自体が豊かさであるとも思えます。一つの地域内で、知らないレイヤーにジャンプできることのおもしろさを感じています。

また、昨年この場でご紹介した「まちまち眼鏡店」というWEBマガジンでも、自分たちが知らなかったまちの姿を人というフィルターを通じて知ることが多くあり、そういう意味では汲めども尽きない魅力がまだまだあると思っています。

サム・ホールデンと申します。私はアメリカ人ですが、9年前に東京に来て吉見先生の研究室で修士論文のお世話になりました。吉見先生に初めて会ったのは、この会のキックオフイベントだった気がします。

サム

今は、ジモトに根差した様々な活動をしています。一つは東京で「一般社団法人せんとうとまち」という団体を立ち上げ、北区の「滝野川稲荷湯」という現役の銭湯の隣で二軒長屋を改修してコミュニティスペースをつくり、運営しています。もう一つはこの3年間、2拠点生活を続けている広島県尾道市で、仲間と一緒に3軒の空き家を改修し、住民のための万屋（よろずや）と図書館をつくろうとしています。基調講演の中で示された「2050年の社会像」にあった、本格的な移民の受け入れというところ、国内で関係人口を増やすというところはまさに私の生活に関わることなので、その観点からお話をしたいと思います。

まず、なぜ銭湯の活動に取り組んだのかです。9年前に東京に来て本郷に住んでいた際、留学生という孤立しやすい環境にありましたが、銭湯という場所を見つけてからは、日常的に通う銭湯を通じてまちに馴染むという経験をしました。東京中の銭湯に通うようになってからは、巨大都市のもっと小さなスケールのまちにたくさん出会うことができました。今後、日本社会が本格的に移民を受け入れる社会になるのであれば、移民の方を社会に馴染ませたり、彼らから何かを学び取ったりする営みが、まちの中でも共感し合えるほどの小さなスケールで行なわれる必要があると思っています。これまで、大企業や大学が海外から労働者や留学生を受け入れ雇用し、その後、国へ帰すという移民政策を行ってきたわけですが、私自身がここで暮らしていきたいと思うようになったのは、小さなスケールのジモトを見つけてからです。銭湯が、多様性を寛容に受け入れる場所だったからこそ、今ここにいるのだと思います。

また、関係人口の観点でお話すると、3年程、月1回のペースで尾道に通って空き家を改修しています。尾道は、昔から空き家再生が活発な所として知られていますが、外から来た人としておもしろい活動ができてるのは、横のつながりが非常に強いからかもしれ

ません。常に様々な人たちがそのまちを訪れたり、隙間にしばらく滞在したり、つながって紹介し合ったりするうちに、空き家をタダでもらって何かしらまちを豊かにする場所をつくったりできる。そんな環境があります。

尾道で様々な人たちとつながる濃い時間を過ごして東京に帰ってくる度に、東京でも横のつながり、特に、海外から東京へ来ている人たちとゆるやかにつながれる環境があれば良いと思います。関係人口の概念は、東京から地方に行くことに限られているように思われがちですが、もっと東京の中に、外から人を受け入れて横のつながりを広げていけるような空間をつくらなければという気持ちもあります

「まちと」名もなきジモト民」の関わりしろを、どうつくるか

沢辺

ここまで3名の方に「吉見ジモト論」を契機にしたそれぞれの取り組みをお話いただきましたが、登壇者の中で質問のある方はいらっしゃいますか。

庄司

サムさんへ、特に尾道の話について伺います。私は一時期、兵庫県の丹波地域の方々と「関係人口を増やそう」という取り組みをしていました。私が地域でワークショップ等を行っていたとき、「関係人口とかいう奴は、こっちに来ても草刈りとかやらないじゃないか。楽しそうなことだけやって、都合がいい時だけ来て帰っていくだけで、あんな奴は嫌だ」という言われ方をしたことがあります。私もカチンときて、「あなたたちだって、東京へ来てそんなことしないでしょ」と言い返したことがあります。つまり、私は関係人口という一方通行感というか、バランスの悪さを感じるんです。東京の人が地方へ行き、深く地域に入りこむのであれば、地方の彼らも東京に来て、深く地域に入り込んだら良いじゃないかと思っています。

サム

関係人口は可能性がある概念だと思う反面、実行しようとする結構大変だと思うのですが、両方向で行き来するサムさんはどのようにお考えですか。

確かに、関係人口というと東京の人が地方と関わりを持つことを想像するのですが、お話を聞いていてひとつ思ったことがあります。昨年末、尾道の友人が上京した際、私たちが運営する「滝野川稲荷湯」横のコミュニティスペースで、彼女の畑で採ったレモン等の農産物を販売してもらったり、尾道の展示をしてもらったりという機会を1週間ほど持ちました。彼女はたまたま私とつながっていたので実現できましたが、地方の人からすると、東京へ来て何か活動することは金銭的なコストが高く、受け入れ場所(器)がそもそも見つけられないというのが現実的な問題だと思います。

庄司

今は本当に東京のホテルが高い。サムさんが運営されているような場所を安く借りることができれば、お互い様の精神で深く入り込み、お手伝いし合うことも可能になると思います。

菊地

サムさんの器の話に関連して、強く思っていることがあります。それは、今回の座談会のテーマ「これからの東京で何ができるか」の主語を考えたいということです。恐らく、その主語は、我々や東京文化資源会議ではなく、東京に関わる、東京をジモトとするすべての人々だろうと思います。考えたいのは、「名もなきジモト民」が東京で何かをしたいと思ったときにどうしたらいいのかということです。今は、その答えが分からない状態です。後ほどご説明しますが、秋葉原は特に、「名もなきジモト民」の関わりしろがまちの中に見当たらないのが現状です。秋葉原は消費文化が根付いているので、お金を落とすことはできるし、ボランティアで歩行者天国の警備等もできますが、その先に、まちに関わる回路がありません。

ここにいる方々は、正当性を持っていて名が立っている方ですが、市民の方たちと普段接

点がある庶民派でもある方ばかりなので、どんなことをすれば、まちとの関わりしろができるか、人々を受け入れる器ができるか、そういった話を伺ってみたいです。

「名もなきジモト民が何かしたいときにどうしたらいいか」という菊地さんの問いについて、どなたかご意見ありますか。宮崎さんのお話では、偶然が続いて谷中との関わりしろが生まれたわけですが、「偶然をいかにつくるか」というのが、菊地さんのお話だったと思います。偶然を待っているだけではダメなことだと思えますが、その点に関して、自らのご経験やジモトで取り組まれていることなどはありますか。

私の経験上、突破口がひとつでも開けると向こうへ広がっていく感じがしますが、その突破口にどうやったらたどり着けるのか、はつきりしません。

まちに関わりたいたいというモチベーションがどういうものなのか、活動しながら私もよく分かっていないところがあります。受け皿としてのまちや地域に受容しているだけでは少し足りないという想いを抱える名もなき市民が、結構な数いるのではと感じています。そういったモチベーションを表現する場所がない、もしくは見つけられないということだと思うのですが、地域には様々なチャンネルがあるということ、私も段々分かってきたところです。

出身地である群馬は、本当にお金を落とすしか関わりしろがなくて、お金を払わないと居場所がないという感覚が東京より強い。東京の郊外化、いわゆるファスト風土化の現象ですが、その地域で消費者としてしか振る舞えないことの窮屈さがあります。だからこそ、ちょっとした機会に提供者側に回ってみると良いのではないかと感じます。今日、私の店では「子どもベイク」という活動をしていて、ここでは子どもたちがお店を開いて、お客さん子どもだけ。そこで、実際に金銭が交換されます。子どもは、消費者としてしか振る舞わせてもらえない最たる存在なので、楽しんでくれると思っています。

一方で、谷中ではちょっとしたことで提供側に回るチャンネルがあつて、「ご自由にどうぞ」というものが道端にやたら出ていたり、ちょっとしたフリーマーケットが勝手に開かれていたりします。そういう回路がまち中に散りばめられていると、受容するだけの人間としていくことの窮屈さを、少し突破することができると思います。

そのくらい小さな活動で満足するのか、ちょっとした気分転換に過ぎないのではないのか、もっと地域に対する能動性・主導権を市民が持つていくべきだという話になると、段階が変わってくると思います。ただ、地域に能動的に関わる市民への変化は、小さな提供活動と地続きだと思っています。

まちに関わりたいたいというモチベーションは、コミュニケーションや人間の関係性だと思います。今の社会ではコミュニケーションの機会や人と人との関係が欠落している感じがして、ではどこでつながるのかと言えば、住んでいる所、地域、ジモトのようなものが近くて一番手軽。だからそこを拠点にしよう。というのが私なりに理解した「吉見ジモト論」のジモトです。

その上で菊地さんは、「そうは言っても、ここにいる人たちはいろいろな活動をバリバリしているじゃないか、このレベルを皆に求めたところで、多くの人にとって難しい。だからそれに代わる方法論をつくりたいと悩んでいるんだよ」とお話しいただいたと思っています。

「まちに関わる回路を求めている人」に対するはじめての一步は、情報公開ではないかと私は思います。地域コミュニティや「HAGISO」の取り組みを紹介したり、月に一度は開かれた運営会議のようなものを開き、その情報を公開することが大切だと思うのですが、最初の一步を誰かが踏み出さないと、すべてが始まらない気がします。

この議論を続けていると、会場からの質問時間がなくなってしまうそうです。再び、「吉

見シモト論」をどう読みどう感じたか、自己紹介を含めて菊地さんからお話してください。

「カルチャーを生むカオス、ジモトづくりの役割分担」

菊地

国際大学グローバル・コミュニケーション・センターで研究をしています、菊地映輝と申します。この場で「専門は社会学です」とは恐ろしくて言えませんが、社会学っぽいことを考えながら、どうやって文化が生まれ、成長していくのかを日々考えています。

東京文化資源会議の中では秋葉原チームに所属し、3月まではプロジェクトマネージャーを務めていましたが、一度少しお暇をいただき、今は自由に暴れるというフェーズにいます。吉見会長の基調報告に対して思うところを、先ほど庄司さんがおっしゃっていない観点から発言したいと思います。

まず、秋葉原という呼び方はとても反縦割りだということです。「秋葉つ原」が訛って現在「秋葉原」と呼ばれる場所は、行政区分ではありません。主に千代田区と台東区にまたがる、抽象的には外神田にあたるエリアで、当時のジモトの人たちがつくり上げた認知的な空間であると言えます。

個人の意見ですが、最近の秋葉原はつまらないというのが正直なところです。理由はいくつかありますが、一つはまちと人々の関わりしろが少ないという点です。秋葉原の文化は消費を主体にしているのですが、消費以外のまちに関わる手段の不足を感じています。

それに関連して、ジモトがバトルロワイヤル状態にあることも、秋葉原のつまらなさに拍車をかける可能性があります。外神田という場所は神田明神の氏子エリアで、昔ながらの飲食店も多くあります。秋葉原に集まるオタクと一口に言っても、その中には昔ながらの電子工作とかパソコンの自作に熱中している人もいれば、アニメオタクや、いわゆる生身

の人間に熱量を持っているアイドルオタクもいて、お互い相容れない。ジモト秋葉原を巡り、「自分が愛している秋葉原はこうだ、自分が愛している外神田はこうだ」といったような戦いが内在しています。

同じ空間で戦い合っている方が文化は強化されていくという説がありますし、社会的にみればむしろ良い状況なのですが、この状態をバランスよく持続させていくのは難しい。地元がバトルロワイヤル状態だと新しいものが生まれにくく、行政もからんで再開発するかどうかで関係者の議論が紛糾する恐れがあります。例えば、秋葉原では今、外神田1丁目の再開発が話題になっています。「大きなビル作りたい」と思う側と、「いや待ってくれ、それは自分たちが知っている秋葉原ではない」と思う側の間で衝突が起きると、がんじがらめになってしまう。

今日まち歩きました湯島には、新しいコンセプトカフェやメイドカフェのようなものがどんどんできていて、正直、今は湯島の方がおもしろいです。これらのお店は昔のスナックやバーの居抜きで入っているため、家賃は秋葉原より安く抑えられていると想像します。さらに重要なのは、湯島という場所はエスニックにも開かれていて、魅力的なエスニック料理店が沢山存在しています。ある意味カオスというか、何かこう雑なところに新しいカルチャーが生まれている、そんな状況です。

私はゴールデン街にも足繁く通う人間なのですが、新宿もエスニックに開かれていて、最近は一丁横キッズのようなストリートにたむろしている謎の若者たちがいるところに新しいカルチャーが生まれています。ただ、そこにも歌舞伎町タワーができた。大きなデベロップパーさんが入ってくると、私としては少しおもしろくなく感じます。

同じことが今、秋葉原でも起きています。再開発自体が悪いことだとは思わないですが、縦割りのな感じで、ある種の資本に駆動される何かが入って来たときに、まちがおもしろ

くなくなっていく事態をどう打破すればいいのかを考えないといけないし、これまでも考えてきました。今日、吉見会長の話を伺って、その打開策みたいなものにこの場で辿り着けたらいいと思っています。先ほどの質問も、こういった問題意識から出てきたものです。菊地さんの、「自分でプロジェクトを起こすぞ」という強い意志がない人にもまちとの関わりしろがつくれるかというお話についてですが、今はネットの時代でもあり、論じることも関わることはないかと言ってみたいと思います。

秋葉原であれば、秋葉原が好きで、秋葉原的なものにアイデンティティを感じている人は国内外にたくさんいます。そういう人たちが「秋葉原ってこうあってほしい」とか、「自分が好きな秋葉原はこういうものだ」とか、「秋葉原がこっちの方向に変わるの嫌だ」とか、そういった意見を公開されたネット上で論じることも、関わるということなのではないでしょうか。もはや、身体が秋葉原になくても良いのではないか。このような議論は、ネット世論や開かれた情報公開のようなことにもつながると思います。

一方で、現状の議論はやはり住んでいる人の一票や、地権者にどう譲歩するかということにかなり強く引っ張られてしまっていて、正直無力だと感じます。もちろんジモトにお住まいの方もいろいろ考えていると思いますが、住んでいないのに、秋葉原のプロジェクトを5年も続けている人たちもいるわけです。今までの意思決定のやり方の中では、あるエリアに愛着や関心を持ちながらも、身体がそこにない人の意見を受け止めるところがない。その点が非常に残念だと思っています。

我々のプロジェクトでは、同人誌をつくったりしてきましたが、そういった活動が「新東京ビジョン」につながるようになってほしいと思います。「新東京ビジョン」は、住人や土地や不動産を持つている人だけのためのものではなく、住んでいない人も関わるような意思決定なりビジョンづくりであってほしいと思います。

ただそうになると、地域外からもエリアの事情を一切考慮せず、感情的に反対する人からの意見も受け止めることになるので、同時に大変だとも思います。

先ほどの菊地さんの話を聴いて、端的に言うところ、「行政が偉そうな介入をしてくるなよ」といった雰囲気を感じました。乱暴なまとめであることは自覚していますが、先程の「吉見ジモト論」でいくと、正規戦、ゲリラ戦のうち、どちらかというと正規戦に関わる部分かと感じています。正規戦の主体の一つである行政は、ジモトづくりやジモトでのコミュニケーションづくりに対して何をすべきで、何をしない方がいいのかを考えることが大切ではないかと思っています。

私は渋谷に住んでいますが、そもそも原宿なんて半世紀前にはなかったわけで、比較的家賃等の生活コストが安いから、そちらへ広がっていったというのが実態です。そこで菊地さんへ、都市の広がり方とそれに対する行政の関わり方、再開発の計画の仕方について伺ってみたいと思います。

まず申し上げたいのは、行政が嫌いわけではないということです。ただ、正規戦とゲリラ戦をどう組み合わせればいいのかを、行政はやはり分かっていないと思っています。例えば、先ほど庄司さんが「ネットでその場所について語る」という関わり方の話をされていましたが、これは確かに新しい時代の関わりしろというか、秋葉原とネットの親和性が高いこともあり、秋葉原についてネット上で言及される機会は多くなっています。

先ほど出ていた「神田まちづくり指標」や、「インターネット上の言説」を、行政の行動や活動の指標として取り入れるといった方法はあるだろうと思います。地域に身体がない人の意見は、ネガティブなものも相当混じります。行政側がネガティブな意見を無視せず、むしろプラスに解釈して開発に活かすことが求められるのではないかと思います。

正規戦とゲリラ戦をきちんとつなぐという意味では、東京文化資源会議が大切な存在だと

いうことでもあるわけですね。
 そのとおりです。私のような飛び道具、鉄砲玉を許容するというのが、東京文化資源会議がつなぎ役を果たす上での一つの戦法かもしれません（笑）。

一人をつなぎ、まちを開く「スポーツ（遊び）」の力

逢坂裕紀子と申します。2023年4月から国際大学GLOCOMに研究員として着任しました。東京文化資源会議では、スポーツ文化資源プロジェクトチーム（以下、「スポーツチーム」）でプロジェクトマネージャーを務めています。

スポーツチームは、文字通りスポーツに関する活動をしているのですが、スポーツといっても競技スポーツではなく、広い意味でのスポーツ、ゲームや遊びといった文脈でとらえていただいた方がより正確かと思えます。そういったスポーツを絡め、既存の枠組みを超えて都市空間の中で遊びの場所を生み出す、あるいは日常的な遊びというものを空間に埋め込むということを実践してきました。

例えば昨年開催された「ひじりばし博覧会」で、スポーツチームはラジオ体操に関する企画を実施しました。神田明神では、いつも朝6時半からラジオ体操が開催されていて、さらに参加させていただき、その後、秋葉原やお茶の水界隈の公開空地数か所を使ってラジオ体操を実施するという試みをしました。

ラジオ体操やダンス等の表現行為など、場所を一時的に占有する取り組みは各地であると思うのですが、空間を使う側と使われる側とで、相互にどういった関係が発生するのか、どういう仕組みがあればそういったことが可能になるのかに関心を持ち、様々な実践を重ねてきています。

今回のテーマ「ジモト論」に関して言いますと、東京都の人口が2030年をピークに減少すると報道されました。全国で人口減少が進んでいる中、東京都を含む首都圏のみが上昇を続けてきた時代もあと数年で終わります。吉見会長の講演で触れられていなかったことの一つに、生涯未婚率の上昇がありますが、これが非常に重要だと思っています。

今後、東京では単身高齢世帯数の増加が予想され、単身高齢者の人と人とのつながりはより希薄になっていくことが分かっています。そこをどうつなげていくかと考えた時に、スポーツが人と人をつなぐ一つの場になると考えています。例えば、中国の気功や日本のラジオ体操のようなスポーツを通じて、ある特定の時間にその場に集った人とコミュニケーションをとる機会づくりが可能だと考えています。

サムさんがお話しされた銭湯にも通じるところがありますが、その場に偶然集った人同士で、私的な領域に踏み込まず、けれどゆるくつながって承認し合ったり、相互交流できる時間が必要になっていく中で、そういった機能を果たすのが銭湯や公園、公開空地での活動になるのではないかと思っています。

逢坂さんのお話で、スポーツを都市と結び付ける観点が非常に新鮮でした。私は、大学の卒業制作でホイジング（Johan Huizinga）という「遊び」と都市論・文化論を結びつけた人の文献「ホモ・ルーデンス」を参照したのですが、「遊び」は、空間を一変させる力があると思っています。ちょっと線を引いてサッカーをやろうとすると、急に手を使っているというように拘束力が強くなりますが、そういう競技スポーツに限らない遊びは、あらゆる文化とつながっていると感じています。例えば、茶室のにじり口や飛び石をつくるということは、そこを通り、踏むことがルールになるわけで、それはある種、遊び的・スポーツ的なことに近く、しかも一変することができるといって側面はとても柔軟だと思っています。

ラジオ体操も本当にそうだと思います。先日、私もラジオ体操に参加しましたが、これがあることによって「しょうがねえな」と、おじいちゃんたちが朝早くに集まってくる。あれほどまでに、参加が誰にも許される感覚が浸透している習慣は、とても貴重だと思います。しかも、早朝から爆音でラジオ体操の音楽を流すことが許される。盆踊りもそうで、盆踊りの異様な盛り上がりとか、そこにいることが許される感覚というのは、消費を超えた一つのアクティビティだと思います。

自分もそういうことをやりたいと考えていたことを、思い出しました。既成のスポーツに囚われず、もう少し考え方をゆるくしていくと、文化一般に通じるものがある気がします。文化的に規定されたルールとそれに反応する行動、例えば、畳の上に靴で上がらないというルールは、私たちの遺伝子に組み込まれているレベルのルールだと思うのですが、そういうものがその上に起こし出すアクティビティだとか、洗濯物の干し方だとか、そういうものと通ずるものとしてスポーツと都市を考えるところではないかと思いました。

ラジオ体操はかなり制度化された仕組みになっているのでそれは別として、今、公園には山ほど禁止事項があり、そこで何かをすることが難しい状態にあります。その状態をどう変えていったらいいか、あるいは公開空地で一時的に何かをしたいと考えたときに、どのように進めていけば良いかについて、我々はあまり術を持っていません。場を活用する上で、土地を所有する側や管理する側が感じるリスクをどう和らげていくかに注力する必要がありますがあると思っています。

そのための取り組みとして、制度化されていない使われ方をどう制度化していくか、制度化的ためにはどういう仕組みが必要で、どういう空間デザインなら可能なかをチームとしては考えています。

吉見会長の講演で、「平成時代という概念が私たちの目を曇らせる」という話がありましたが、

生まれてすぐ平成になった昭和を知らない身としては、感覚として分からないところがあるところと、日本経済の衰退と人口減少を前提として生きてきた我々30代以下の人間には日本社会におけるしんがりのような気分がどこかあると思います。その撤退戦をどうゆるやかに進めていくかという視点の有無でも、世代間の温度差を若干感じました。

一会場からの質問・ご意見

会場1

私は大学生ですが、水平統合されたコミュニティに若者をどう引き込むかについて、登壇者の方にお聞きしたいです。

感覚的に、私の周りの大学生でジモトに関わっている人はなかなかいません。そういう活動をしなくても生きていける社会が既に東京に構築されてしまっているのが一番大きい問題だと思っています。例えば、情報公開の話では、ネットで調べれば何でも出てきますし、SNSで知人等に話を聞いたり、不特定多数に発信すれば欲しい情報が手に入ります。そういった時代の中で、ジモトに関わるモチベーションが若者には生まれにくいかと思っています。

沢辺

一方で、若者は文化を創り出す担い手でもある強力なプレイヤーです。みなさんは、そういう若者を「コミュニティをつくる側」にどうやって引き込むのかについて伺いたいです。素晴らしく虚を突く意見ですが、庄司さんからいかがでしょうか。

庄司

その問いへの答えは、若い人に責任とやり甲斐のある重たい仕事を任せるということではないかと思います。特に都会では、就職すると、組織の上が高齢層ばかりで、長期間メインプレイヤーになれないという構造があります。

ですが、地方へ行くと若手が足りず、若者が重い仕事を任される機会が増えます。そうせ

ざるを得ない状況があるのかもしれませんが、むしろ、そういう所でのびのびやっている若者がいるのではないかという印象が地方にはあります。都会でも、思い切って若くてやる気のある人にお任せすることが大事なのではないかと思えます。そうするとシニア世代が、「じゃあ、俺たちは何をすれば良いんだ」という話になりますけども。

宮崎

先程も、「どうしてコミュニティやまちに関わることが必要なのだろうか」と思ったのですが、必要と思っていなければ別にいいのではないかと思いますし、若者についても、お客様つばくコミュニティに引き込むことには非常に違和感があります。けれど、おもしろい時代ですし、昔ほど年上の人たちが偉ぶれない時代になってきていますから、何かできるフィールドとしては開けてきていると感じています。

ですから、興味がある人はやればいいし、別にお客様として迎える必要もないと思います。変に若者に媚びる大人は気持ち悪いと思うので、若者もおもしろそうと思えばやればいいのではないですか、という感じです。

会場2

下北沢の事例を少しご紹介したいと思います。吉見会長とは、道路問題等で一緒に闘っていたのですが、その時は行政と交通事業者と住民が対立し、それは負けてしまいました。

その後、今度は小田急線が地下化された跡地をどうするかという時に、世田谷区の保坂区長が、「北沢デザイン会議」という対話の場を作ってくれました。その後、「北沢PR戦略会議」という場に地元民や下北沢に通っている人たちが集まって、このまちをどう作っていくか、という話し合いが始まってから、急に流れが変わりました。

小田急電鉄が「北沢デザイン会議」で出てきた話を聞いて、「容積いっぱいに建てなくてもいいから、楽しいまちづくりをしましょう」というように態度が変わってきたわけです。その時、「北沢PR戦略会議」に若者がついて来たのは、「自分が関わったら、駅前広場がまちが変わるかもしれない」という期待感からだったと思います。今まではカタチだけの

ワークショップで、「こんなことを言ったところで絶対何も変わらない」と思っていたわけですが、小田急電鉄は支援型開発をして、本当に容積いっぱいに建てなかった。若者にとって、この成功体験は大きかったと思います。

また、「北沢PR戦略会議」から生まれた「シモキタ園藝部」は、大都会で、ほとんど知らない者同士が実際に縁をつくっている、良いジモトの例になりました。

一方で、まちづくり正規軍であるデベロッパーの再開発は容積をたくさん貰わないと難しい。私たちはゲリラ軍として「神田かいわい指標」を開発しようとしています。それは、「このまちはこんな感じですよ」とジモトの人たちが感じていることを数値化してデベロッパーに理解してもらい、その指標を取り込むのであれば再開発のきっかけを作ってもいいよ、という行政の制度にまで落とし込めないかと考えています。

町内会だけでなく、まちに来る人たちとも一緒に指標を作らないといけないわけですが、多方面からウィキペディアのように書き込める仕様を考えていて、できた指標が、実際のまちづくりにつながればいいと思っています。

会場3

質問ではなく、御礼と感想を伝えたくて発言しました。今日はチラシを1枚いただいて、ただの展示会と思って来たのですが、こんなに充実した内容だとは思いませんでした。これまで、自分が住んでいる場所以外にあまり興味を持ったことがなく、ジモトをサポートしようという気持ちになったことはありませんでしたが、この2時間を経て、新鮮な気持ちでいっぱいになりました。

逢坂さんがおっしゃっていたラジオ体操のことは、非常に興味があります。今まで仕事ではいろいろなお客様のところを回ってきましたが、休日には、消費者の一人として買い物に行くくらいしかできていませんでした。自分が住んでいるところ以外の場所とは何のつながりもなく、支援したいというモチベーションは全くなかったのですが、ラジオ体操等

様々な活動をする場所をつくっていただくことで、いろいろな場所の人とのつながりが増えていけばいいと思いました。

「各自が興味に没頭し、理解者と手を組めばジモトは楽しくなる」

沢辺 最後に、「吉見ジモト論」に対する総括的な発言を各自、3分程度でお願いします。

菊地

初めて東京文化資源会議に参加したのは10年前でしたが、秋葉原も文化資源区に含まれているという話だったのに、会場にはスーツ姿のおじさんしかおらず、「この人たちが秋葉原を語るなよ」と思っていました。私も当時は20代だったので尖っていましたが、今では35歳となり、ずいぶん丸くなりました。

今日は役割的にヒールを演じていたわけですが、一番印象に残っているのは、大学生の方の「どうしたらコミュニティに自分たち若者を巻き込めますか」という問いかけです。やはりその質問はおかしいと思います。

冷静に考えていたのですが、この人たちに巻き込まれたら、ラジオ体操をしないといけないわけです。大学生でラジオ体操なんて絶対いやでしょうし、だったらむしろTikTokで流行っているダンスをすれば良いわけです。自分たちの方が、上の世代よりもしろくできると思うことをやる、そのためにお金が必要であれば、誰かが最低限の活動費を与えたり、先ほど小林先生がおっしゃっていたように、デベロッパー等の理解ある人たちをうまく巻き込んだりすることが非常に重要で、それこそが2050年のジモトに必要なことなのだと思います。私自身も年齢を重ねていきますが、年下の人たちのために頑張って活動しようと思いました。

沢辺 上の世代を利用しろということですね。

菊地

そうです。上の世代にも理解のある人たちがたくさんいます。そういう人たちと手を組んでいくことが大事だと思います。

庄司

私はやはり「新東京ビジョン」なるものがどうなるかということに段々と関心がわいてきています。私自身は、普段は政府の会議で座長を務めたりと役所にどっぷりと浸かっている人間ですが、一方で、行政の限界や、責任の曖昧さ等の課題も感じています。

ですから「新東京ビジョン」をつくるとしても、行政に届けるとか行政に聞いてもらうとか、行政をゴールにするようなところに持っていくことなく、枠組みを超越するような、あるいは地域的な境目を超越するようなビジョンにできないかと思っています。もちろん、行政もパートナーとして入っていても良いですが、あくまでもメンバーという位置付けで考えています。

秋葉原の話に戻せば、中心部で活動をしようとする行政的な縦割りの枠にとらわれた政治的なやり取りで、全く物事が動きません。秋葉原の真ん中でラジオ体操をしたら怒られると思いますので、特に若い人はそういうところには突っ込まない方が良いのではないかなと思います。そんなところで時間を無駄にするくらいだったら、周辺部で責任が曖昧なところを見つけて自由にやりたいことをやった方が良いと思います。

それから、上の世代をどうするかという問題がありましたけれども、私が尊敬する先輩たちは、そういうところにおもしろがってプレイヤーとして一緒に入ってきてくれる方々です。オタクの世界もそうですけれど、深いところで専門性を極めている方ですね。今日もまち歩きで一緒にくださった先輩方が、とても楽しそうに参加してくださいました。一緒に楽しんでもくれるプレイヤーとしてシニア層も入ってくると活気を出していけるのではないかと思います。

一方で、若い人が取り組むのはどうしても小さなものになりがちで、やはり東京は、大き

いことがやりにくいという課題を持っていると思います。先ほどの小田急電鉄の例はとても良い例で、あれくらいスケールの事がどうやってたか私たちは考えないといけないと思いました。

―余地で行う小さなジモトの活動が、大きな市民活動につながっていく

サム

まちに関わる主体の話で思ったことがあります。吉見会長は昭和通り上部の首都高速を取り払う提案をしているわけですが、基調講演の中で触れられた海外の事例（シアトルやバルセロナ）等を見ると、こういう提案がそのまちに住む若い人たちや、その空間を利用したい名もなき市民から自然と出てムーブメントになっている。

「市民活動」の対象と考える規模が、日本と欧米で違う気がしています。私や宮崎さんがやっている活動は、まちの最も小さいスケールで変化を起こしていますが、アメリカ人としての視点から実際に高速道路を取り払ったシアトルのまちをみると、まちに変化を起こす活動のスケールをシアトル全体、まち全体という大きくとらえ、政治問題として見ている人たちが多い。その理由として感じるのは、「交通システムが整備されていない」とか「安価で住める家がない」とか、「治安が悪い」とか、都市全体の機能不全がたくさん起きていることです。そこで、市民がうまくゲリラ戦と正規戦の戦術を組み合わせ、改善に取り組んでいるわけです。

一方、東京は都市の単位でみるとあまり機能不全が起きていないし、行政に任せっきりで割とスムーズに動いているので、大きいスケールで問題を考える市民の意識が育ちにくく、より小さなアクションを、小さなスケールで起こす方向になるのだと思います。

これからの東京の未来を考えると、徐々に人口が減少していく中で、都市の機能不全が起

きて、都市としての在り方がもつと問われるのだと思います。今様々な場所で小さなスケールで動いている主体が横につながって、より大きな影響力を持つことに期待したいですが、そのために「まちに関わる」という意識をより大きな都市という政治的な領域につなげていく必要があるのではないかと思っています。

宮崎

今日の議論で共通の話題があるとすると「遊び」ではないでしょうか。先ほど、スポーツも遊びという話がありましたが、「遊び」には単に遊びという意味と、余地という意味もあると思います。菊地さんのお話にもあったように、秋葉原に空間的な遊び、余地がなくなってきたと感じています。基本的に、高額な賃料を払わないと何もできないという状態になること自体が、機能不全であるということだと思っています。

私は、偶然にいろいろやらせてもらっているわけですが、その舞台はすべて余地だと感じています。空間的な余地だけではなく、時間的な余地もあります。例えば、老朽化した築60年のアパートは、投資回収が終わっているわけです。投資回収後の第二か第三の人生くらい、建物の人生の余暇、ボーナスタイムであれば、「別にそんなに賃料要らないから何かやってみてよ」とオーナーさんが私たちに任せてくれることが結構多い、というのが実態です。再開発を待つ建物や、いつかなくなる建物を暫定利用するとか、私たちがやっているのは大体そのような感じです。まっとうな投資回収が必要であれば、私たちがやるうとしていることは絶対に出来ないと思っています。

空間的な余地や時間的な余地というものと、私たちのような小さい会社が好き勝手できるわけです。自分たちは楽しいですし、割と地域にとっても大事な場所になっているのではないかと思っています。もちろん、ビジネスに乗せることは大きなことですけれども、それだけを考えるのでは本当につまらないものになります。都市の中でいうと、特に公開空地のような。空地なのに遊びが全然ない、入り込む余地がない、禁止事項がたくさ

ん書かれていて使われ方の余地もない、そういった余地のなさが、自分たちのまちの首を絞めていると感じています。そこは逆に余地を無理やりつくるように制度化する等、それが長い目で見ると、まちを豊かにする気がするので、そういうやり方もあるのではないかと思います。

逢坂

私は現在スポーツチームのプロジェクトマネージャーを務めています。もともとスポーツの経験があるわけではありません。むしろ苦手意識を持ってチームに参画したわけですが、自分が抱いていた競技スポーツに対するイメージとは異なる、実際にスポーツが持つ可能性や、それを地域で展開する時のおもしろさは、このチームに入ったからこそ認識できたことだと思っています。

先ほど、庄司さんもおっしゃっていましたが、自分の声が届くという感覚があるのとないのとは、活動に関わるモチベーションが大きく変わってきます。スポーツチームは非常に水平的なチーム編成なので、年齢や立場に関係なく活動に参加できます。スポーツチームの活動に関心のある方は、ぜひご連絡ください。

今日の発表もディスカッションも、非常に勉強になりました。私は東京生まれ、東京育ちで他の地域に住んだことがないため、関係人口にも正直ピンときいていませんでした。これから東京が人口のピークを迎えて衰退していく時に、関係人口等、今はやや他人事に考えていることがより自分事になってくるので、その際は、既に各地で進められている様々な取り組みや、サムさんがされているような尾道の活動等を参考に勉強していきたいと思いました。

一隙間を遊びに変えるムーブメントの拡大が文化資源会議の役割

沢辺

最後に、吉見会長から、今日の議論を聞いて何かご発言があればお願いします。

吉見

今日の議論の結論は、今、宮崎さんが言ってくださったことと先ほど小林先生が言ってくださったこと、この軸線に尽きると思います。私は、今日、宮崎さんがホイジンガの『ホモ・ルーデンス』で参照して卒業制作をされたということを初めて聞いて非常に納得したわけですが、ホイジンガがこの本を書いたのは1930年代の半ばです。あの本が書かれた当時、彼はオランダのライデン大学の学長をしていました。当時のヨーロッパはナチズムが台頭し、ヒトラーがオランダやフランスへ攻め込もうとしていた時代です。ナチズムの重圧を感じながら、彼は「遊び」について言及した。人間の根源というのは、全体主義全体支配、管理主義の中ではなく、遊びの中にあるのだということを、反ナチ宣言として書き、彼は学長をクビになりました。そういう鬼気迫る本です。その精神というものがやはり、いろいろなところに遊びを見つけていく精神、公開空地は遊びなのだという言葉につながるのだと思います。

宮崎さんは事業者としても成功されていて素晴らしいと思うのですが、若者も名もなきジモト民も同じです。若者側がどうやって巻き込まれるのか、あるいは自分たちがどうやって関わればいいかと言えば、空地を隙間にし、隙間を遊びに変えていく、これが鍵です。空き家も、老朽化された家屋も、空き地も、ガード下も、あるいは駐車場も空地です。全部を駐車場にしてしまうのではなくて、駐車場を空き地に変え、隙間に変えましょう。これが基本です。そういうスペースがあれば、みんな何かを始めます。

北千住に「BDOY（ブイ）」という劇やコンサート等、様々なイベントを行うおもしろい空間があって、サムさんと同じように活動する岸本さんという方が管理者として運営しています。彼女は東大駒場の総合文化研究科で素晴らしい博士論文を書いた若手研究者ですが、彼女自身は北千住の人ではなくて、世田谷から通いながらやっているわけです。住ん

でいる所とは別の場所だけれどおもしろいからやる、それで尾道まで行く、銭湯でやっていく、そういう人が東京にもたくさん出てきています。

この文化資源区の役割、ジモト論の役割というのは、どうやって小林さんがお話をされた「下北沢の線路街のプロジェクト」にまで広げるかということです。小さい空き地や小さい隙間は既にいっぱいあって、それぞれ若者たちがコミットしていろいろ活動をしていると思います。それを、例えば区レベル、地区レベル、神田全体、下北沢全体、文化資源区全体へと大きなスケールで実現可能にするためには、もう少し大きな仕組みが必要になり、それを本来、東京文化資源会議はやらないといけないと思っています。いろいろと壁があって苦労していますが、この組織の役割は、小さな空き地のプロジェクトや小さな隙間・遊びのプロジェクトを、より大きな遊びのプロジェクトに変えていくことだと私は思います。

下北沢の場合は、「これはどうせ線路だし、線路の上で稼がなくても遊べばいいんだ」とある時点から小田急の人が思い始めました。「遊ぶならば、地域の人たちと一緒に遊べばいいではないか」と。結果、素晴らしい線路街ができ、土地の価値も逆にながったわけですが、同じようなことをもう少し大きなスケールで都心北部区にできないかと考えています。

そのためには、いろいろな人の考え方を変えていく必要があります。そのスケールにしていくときには、やはり組織的に知恵を出し合って、大きなステークホルダーとも交渉していく必要があります。こういうことを私たちはやっていくんだ、これが新しいジモトだ、ということが私なりの皆さんのお話を聞いた結論です。

沢辺 皆さんの様々なご意見、そして青年の一言が効いたところもありますが、吉見会長のまとめの熱を引き出すことができた座談会になったと思います。ありがとうございます。

東京の^② 文化資源を 活用した これからの まちづくり

日時…2023年12月18日(月) 18:00～20:10

場所…学士会館301号室

形式…公開座談会(会員に公開)

座談会出席者(7名、敬称略)

●菊地映輝

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター主任研究員・講師

●沢辺均

ポット出版代表…司会

●三文字昌也

合同会社流動商店共同代表

●庄司昌彦

武蔵大学社会学部教授

●坪田華

独立行政法人都市再生機構都心業務部事業推進第3課課長

●中島伸

東京都市大学都市生活部准教授

●宮崎晃吉

(株)HAGISO代表取締役、建築家

「それぞれの立場で関わる、まちづくりの現状」

沢辺

ポット出版という小さな出版社をやっている沢辺と申します。本の出版に向け、私が司会を担当することになったと理解しています。東京文化資源会議のメンバーではありますが、会社と住処は渋谷区の神宮前2丁目で、地元の商店会に加わっているため、まちおこしや地域開発など本日のテーマと若干の関わりがあります。

本日は、「東京の文化資源を活用したこれからのまちづくり」をテーマに識者のみなさんからお話を伺っていきたいと思います。最初に、ここへ呼ばれた理由を含めた自己紹介を簡単にさせていただき、二巡目として、本テーマとみなさんが取り組まれている活動との接点についてお話ししたいと思っています。

坪田

UR都市機構の坪田と申します。中島先生と神田エリアのまちづくり方針と一緒に作成していました。都市再生の部門におり、昨年までは神田の他、中央区の日本橋横山町という問屋街の再生を旦那衆と一緒におこなっていました。

今年からは、建物は神田や日本橋と同じような鉄骨の建物ですが、新橋・虎ノ門エリアで新橋駅との間をどうするか、どのようにまちとして再生していくのかを考える仕事をしています。3区にまたがる仕事をした結果感じた、区や人の特性の違いについてもお話しできたらと思います。

三文字

三文字昌也と申します。東京文化資源会議では、「本郷のキオクの未来チーム」のプロジェクトマネージャーを担当しています。文京区本郷地域の文化資源（銭湯や旅館）の活用保全をどうするか、なくなってしまうものをどう記録していくか、という活動を7年程しています。

私自身は建築と都市設計の事務所を設立し、全国の文化資源を仕事として扱っていますが、

銭湯や旅館、それに限らない文化資源を守るために、気持ちだけでは超えられないハードルにどう立ち向かうか、日々悩みながら活動をしています。

ここ2、3年は、京島交差点のURさんの土地などをお借りして、壊れてしまった銭湯の部材を使って山車をつくり、銭湯山車巡行というお祭りをしています。文化資源を守るという東京都心だと暗くなりがちなテーマを、どう楽しくこれからの時代に継いでいくかを考えながら活動しています。研究者として台湾の都市計画やまちづくりも行なっていますので、東京、台湾、文化資源、銭湯などのキーワードでどんな話題提供ができるのか、楽しみにしています。

庄司

武蔵大学社会学部で教員をしています、庄司と申します。東京文化資源会議では、「広域秋葉原作戦会議」プロジェクトの座長をしています。秋葉原はおもしろい所なので後ほどお話しできればと思いますが、本職は情報社会学の研究者として、情報化に伴い社会がどう変化するかをいろいろな分野で見えています。それ以外では、いわゆる社会のデジタル化関連、スマートシティ、行政のデジタル化など、東京都をはじめ様々な自治体の委員やアドバイザー、国の委員などをさせていただいています。

他国のスマートシティや政府によるITプロジェクトなども見に行ってきましたが、必ずしも高層ビルが建ち並び、空飛ぶ車が走り、みながメカメカしい格好をしているような都市を目指しているわけではないと感じています。スマートではあった方がいいと思います。昔、私たちがなんとなく描いていたような都市とは違うと感じながら、いろいろと模索をしています。

中島

東京都市大学都市生活学部の中島伸と申します。専門は都市計画学の中の都市デザインでして、東京を中心に地域のまちづくりの活動支援や、過去から現在、未来へとどう計画をつないでいくかということに関心を持ちながら、都市の歴史についても研究をしています。

東京文化資源会議では、「トーキョートラムタウン構想」の座長と、「神田まちづくり懇談会」の幹事をしています。千代田区の神田地域とご縁があり、そのまちづくりを地元の旦那衆や老舗の方々と行ったり、行政の計画づくりの支援をしたり、最近では神田で活動されているクリエイター、企業、地元の町会の方々と一緒に公共空間の活用実験の展開をしています。

菊地

国際大学グローバル・コミュニケーション・センターで研究員と講師をしています、菊地と申します。東京文化資源会議では、「広域秋葉原作戦会議チーム」のプロジェクトマネージャーを務めていましたが、今年の3月から単なる一人のメンバーへと戻りました。私自身は情報社会の文化について研究しています。情報社会の文化というインターネットだけを想像されるかもしれませんが、都市とネットという2つの空間を横断しながら文化ができていくことに注目しています。そのため、どちらかというと若者文化に詳しく、文化資源に関連して出てくる事例がみなさんと異なるかもしれません。

昔、台湾に3ヶ月ほど滞在して以来、台湾の動向にも注目しています。先日文化とテクノロジーの新しい潮流を学びに高雄市取材しました。また、広域秋葉原作戦会議の活動を通じ、秋葉原のまちづくりにもコミットさせていただくなど、本日の登壇者のみなさんとの接点は色々あると思っています。

宮崎

宮崎晃吉と申します。株式会社HAGISOの代表と、一般社団法人日本まちやど協会の代表理事をしています。職能としては建築家で、谷中を拠点に同地域で空き家のご相談をいただき、実際の企画・建築の設計をして、徒歩圏内に8拠点ほど空き家だったところを自分で運営しています。

それ以外にも、「まちやど」という、まち全体を一つの宿に見立てるという活動をhanareという宿泊施設でやっています、その延長線上で群馬県富岡市に現地の人たちと会社をつくり、まちやど「蔭屋 MABUSHI-ya」を運営するなど、東京と地方を結ぶ活動もしています。

「デベロッパーに狙われる都心で文化資源を守る難しさ」

沢辺

ありがとうございます。自己紹介をお聞きしていると、主に研究の方面から関わっている方と、実際のまちづくりに関わっている方がいらっしやり、後者の中にはURという大きいところから関わっている方と、地べた（現場）目線から関わっている方と2種類いらっしゃるようにお見受けしました。

二巡目は今日のテーマである「文化資源を中心としたまちづくり」を自分の活動と重ね合わせて、文化資源をどう扱い、位置づけ、利用しているのかということから話を始めていただければと思います。まず地べた目線から発言をお願いしたく、三文字さん、いかがでしょうか。

三文字

2015年に本郷にあった菊水湯という銭湯がなくなったことが、私自身の活動と「本郷のキオクの未来プロジェクト」が立ち上がるきっかけとなりました。文京区本郷は、かつて武家地だったところが東京大学になり、その周りの土地の多くが学生向けの下宿屋になり、それらが旅館に変わっていった結果旅館街となったまちです。銭湯や旅館など、立派な建物が残っている大区画はデベロッパーに買われることが多いのですが、私たちが話を聞くとところの多くもデベロッパーからの打診があった聞きます。

当時はのほほんとした学部生でしたが、こんなに良いもの、東大生を含めてまちの学生が多く利用しているものがなくなっていくことに、信じられないと思ったのが最初です。ただ、なくなることは仕方ないと、建築的な記録とソフト的な記録をしてきましたが、この

10年間だけでも、文京区内の銭湯や旅館など注目していたものの半分ほどがなくなるとい
う状況に直面しました。菊水湯の廃業を契機にこのプロジェクトが立ち上がりましたが、
本郷に関してはなくなるものを追いかけて記録するばかりで、基本的にずっと負け戦です。
そんななかでもどうか文化資源の持ち主とつながってネットワークをつくり、経営が悪
化したりデベロッパーから連絡がきたときには知らせてもらう形にしましたが、
いざ連絡をいただいても、自分達が数億・数十億円規模のお金を動かさなければ、気持ち
だけでは到底勝てないという状況に直面しました。活動の限界といえますか、その次はど
うするんだという段階にきたということです。

隣町の谷中では宮崎さんがHAGISOを経営されていて、基本的に同じような原動力か
ら活動されてきた大先輩だと思ってみていたわけですが、本郷の地価が急騰してしまい、
本郷に今残っているものはある程度立派な土地の規模があるもので、何をするにしても
も桁感が違うと感じています。

この8年間、プロジェクトでいろいろなものを記録し、時には私自身でまちの建物に少し
ずつリノベーションをかけて小さな拠点を作ってきましたが、実際にこのまちに文化資源
を使ってインパクトを残せているかという点、実は本郷では何もできていないのではない
かという問題意識があり、諸先輩方の慰めと応援をいただきたいところです。

唯一希望が持てるのは、本郷にほぼ最後に残った旅館が存続に向けて前向きな検討を続け
ていることです。某不動産に買われ取り壊されようとしていたところを、地元企業がホワ
イトナイト的に買い受けてくださり、目下、事業計画を練り、その建物をどう維持して次
に残していくかを考える段階にあります。建物所有者と、実際にオペレーターの候補者を集
めてどんどん進めているわけですが、ここで問題なのが、思いがあつて旅館を守る取組み
をしているものの、私たち自身だけではオペレーターをやれるような規模ではないため、

私たちの立ち位置を定めにくいということです。

私たちはボランティアベースで地域資源を守るための活動をしているものの、規模が大き
くなりすぎると、ある意味事業者的な動きをしないとけなくなります。私たちが疲弊し
て手を下ろしてしまうとマンションになるという現状でもがいている中で、東京都心で文
化資源を守ってまちづくりをしていくことの、現実的な難しさや壁を問題意識として持っ
ています。

沢辺

とても有益なお話をありがとうございます。上から破壊する立場では必ずしもないと思
いますが他にいらつしやらないため、坪田さん、デベロッパーに近い立場ということで、そ
ういう都市開発と文化資源の保全をボランティアベースでいろいろ活動されている方にど
う対応しようかですとか、どういうことが必要なのかとか、そういったことはあります。
共感しながら聞いていました。住宅地は正直、規制が非常に難しい面があります。法律や
許認可がゆるく、住宅やマンションが建てられてしまう場所は、手続き上、監視もなけれ
ば民意も関係なく進められてしまうため、非常に難しいと改めて感じました。

坪田

私は商業地区で民間のオーナーがいるビルをメインに担当していますが、居住者に比べて
商業者は、自分のビジネスや、ビルを不動産として考えたときの資産運用に敏感なため、
デベロッパーと会話がしやすい関係にあります。今伺った住宅地における悩みに対して
私を持つているアイデアで「こうしたらいいよ」と言えるものが見つからないというのが
正直なところです。地元の町会、居住者の思いなどはまとめられているのでしょうか。

三文字

そういった方々と話をしていると「あれはなくなつてほしくない、残してほしい」という
声は多く聞く気がします。ただしそこまで関心がない方が最も多いかもしれません。

一再開発前に、開発側とジモトとのオープンな議論が必要

沢辺

今、ピリピリくる問題をお話されたと思いますが、町会も瓦解しているのではないでしょう。私も商店会をやっている関係で町会ともつながりがありますが、住んでいる人の5%くらいしか町会員としての自覚がないほど町会の実体はなく、ほとんどの人は置き去りにされていて、そのことに問題意識を感じている町会にはほほえない気がします。

先日、千駄木2丁目町会の企画部の方からこちらの商店会へ連絡がきました。神宮前2丁目、以前千駄ヶ谷2丁目だったため、千駄ヶ谷2丁目町会という町会名が残っているわけですが、同じ「千」だから交流しませんかと町会長に連絡したけれど返事がないので商店会の方から町会へ連絡してくれませんか、という内容でした。私が町会長へ連絡すると「あとは対応を引き取ります」ということでしたが、そういうことについておもしろいかもしれないと思う感覚すらないわけです。

このような現状なので、まるで地域の声があるという前提で話していますが、本当はないのではないかと私は思っているわけですが、いかがでしょうか。

三文字

本郷でも、町会の人たちが何を言おうと別に土地を動かす巨額のお金は動きませんし、町会の声は住民の一部でしかないのです、町会の声が必ずしも全ての住民の意見を代表してないのは間違いないと思います。

宮崎

先ほどの千駄木の方は偶然知り合いで、千駄ヶ谷に友好町会申請していると言っていました。その人は非常におもしろい方で、町会のツイッター(X)も毎日一投稿やっている素晴らしい方です。私が所属している初音4丁目町会はとても活発で、青年部がどんどん増えていたのであまり参考にならないのですが、地域にある古い建物については町会の人たちは意外と冷めていて、基本的には「あのボロい家でしょう？それを声高に守ると言う

庄司

のもねえ」という感じのトーンです。むしろ、町会などに属していない、地域に思い入れのある人たちの方が、マンションが建つというときにものすごく活動します。

確かに、「そこを残したい」と言ってアイデアを出したり手を動かしたりするのは、住民ではなかったりします。秋葉原もまさにそうで、非住民の秋葉原のことが好きな人たちが秋葉原の将来を語り合ったりビジョンを描いたりしていますが、それがリアルな協議会になった途端に、「やはり住民重視だね」と行政側は動くため、そこをどうすればいいのかで困っています。

中島

やはり行政は基本的に住民、それも町会に加入している住民という狭いところを中心に見ています。逆に言うと、どこへ広げると自分達のコミュニケーションのボールを受け取ってくれる人がいるのかを、行政も分かっているのが大きな問題だと思っています。

コミュニケーションをみながおつかなびくり取っていて、情報を出したくないし積極的になれないところがあるけれども、うまく座が組めてチャンスさえあれば、コミュニケーションをした方が早く進みますし、より良いものが生まれるわけです。コミュニケーションを町場するという可能性が軽んじられていることが一番の問題です。

住民でなくても入れる協議会をデザインしたり、出会える場をつくったりして、いろいろな人たちの関係性を取り持ちながら、「コミュニケーションしても悪いことはないよ。」という実感をつくるのが大事です。いつも行政の方に「出て行って、そこで本音を言っても大丈夫ですよ」と話していますが、「これに困っています」と素直に言えばいいのに、「ちゃんと頑張っています」と問題を隠してしまうことは多々あります。お互いの困りごとをカバーし合える関係づくりが大切だと思っています。

宮崎

ただいつも感じているのは、再開発について議論が始まるのがとても遅いということです。開発側もギリギリまで隠しておいて、申請を出してから地元説明会をするわけですが、そ

ここで紛糾するものの壊すことは決定しているため、建物の階数を1つ下げるか、みたいな本質的でない話を議論するという流れです。もう少し早く議論が始まれば、壊すにしてもそれほど紛糾しないでしょうし、建設的な議論が出来るはずだと思います。

階が1つ減るかどうかはそれほど問題ではなくて、それよりも1階にどういってお店が入るかといった話ができの方がいいし、その賃料を上げすぎないために、階数を1階分増やすことで収益性を担保できるのであれば、そちらの方が良かったりもするわけです。1階に喜んで事業をしてくれるお店を入れてほしいとか、別に億ションを建ててもいいからそちらで還元してほしいといった意見があるにも関わらず、決定事項の上での議論になるので、みんな疲弊しているというのが現状です。先鞭をつける事例をつくっていかないと、思っています。

開発する側の人も、これまで紛糾し続けてきたので怖気づき、ある程度決めてからでないと進められないと思いいこんでいるところがあります。彼らと地域をつなげる役割の人がいて、初めから一緒に考えましょうという座組みが組めれば、もっと建設的な議論ができるようになるのではと感じています。開発を全くしてはダメというのは東京では無理な話。するならいいものを作ろうという議論にしたいと思っています。

沢辺 議論が始まるのが遅いのではないか、隠し気味ではないかという指摘について、開発側の反省はあるのでしょうか？

坪田 私たちは地元と一緒に考える取組みを墨田区京島でも一所懸命やっている側ですが、文京区でも、行政のルールづくりにもっとコミットしてすべきかもしれません。行政に期待してはいけない部分もありますが、そこに一枚噛めるのは行政しかいけませんので。

日本橋横山町は地区計画をつくり、商業用途を必ず1階に入れるという用途制限をかけています。地区計画で縛れることには限界があるため、それとは別にデザイン協議会という

ものを作り、地区計画の届出という小さな行為であってもデザイン協議を必要としています。ただ、間口の半分以上が道路に開いていないといけないというデザインコードをかけて、駐車場の附置義務ルールで駐車場に負けて、間口を1／2取れないのが最大の悩みです。次は地区の駐車場ルールを作らないと、附置義務駐車場に勝てないねという議論をしています。

問屋の旦那衆がボランティアで、こうしたルールの作成やデザイン協議会の運営をしています。問屋の人たちが「このまちが壊れてしまう」という危機意識を持って10年くらいかけて、行政と開発者を巻き込んだ活動をしています。行政をもっとプッシュしたら良いのではないかと思います。文京区はそういう区ではないのでしょうか。

宮崎 私は台東区ですが、椎原さんが地区計画を進めてくれています。一見、床面積が減りそうで地権者としては権利が阻害されるような側面がありますから、なかなか進みづらいと思います。

一民主的に合意形成したまちは、正直つまらない

沢辺 開発者側も行政側も、積極的にコミットしてほしい、言いたいことを言ってほしいという話がありました。私も11月頭にオープンギイベントがあった明治公園の再開発説明会に、地元の役員として参加していました。「明治公園の将来を考える100人委員会」という、誰でも参加できる開かれた会ではあるものの、開発会社が仕切るわけで、結局はこっちの代表、あっちの代表と声をかけ、いかにも今風に、やりたいことを1人3枚付箋に書き、最後に壁新聞を作りましょうというそのやり方に、小学生じゃないのだからと頭にくるわけです。

結局、そこで出た様々なアイデア（明治公園で年に一度、防災のためにお米を炊いてキャンペーンを開き、食と何かをつなげるという案）が良いかどうかは別として、やる・やらないの結論すら返ってこず、本当に形だけだと感じました。開発者が真面目にやっているような前提になっていますが、開発者だっていいところ取りでアリバイ作りだろうというのが私の意見です。これに対するみなさんの反論はありますか。

中島

反論ではないですが、何もコミットしなければ一番手がかからないので開発者も行政も流せるところは流すでしょうし、それは前提として受け止めるべきと思っています。企業は基本的に開発で利潤を追求する存在で、慈善事業のように何かをしてくれることはない。そこは地域とのネゴシエーションでどう企業のリソースを引き出だすかということなので、そういう関係をつくれるか、お互いが共有できる目標をどう持てるかということが非常に大事になってくると思います。

先ほどの宮崎さんのお話の中にもあった「開発して億ションを建ててもいいけれど、1階部分には地元が望む店を入れてくれることが、長い目で見たときにお互いにとって良いよね」といったコミュニケーションを、地域と開発者がどれだけ取れるかということです。明治公園の例が難しいのは、あまりにも規模が大きすぎて、地域との関わりでオンテールさせるためのテーマや、共有できる目標が見えにくいということです。谷根千の規模で一マンション予定地の中で、という場合はオンテールできる方法がありそうですが、開発の規模が大規模になればなるほど、ネゴシエーションしてオンテールさせるテーマを一つの商店会や町会地域だけで持つのは難しいと思います。

今、東京文化資源会議はプロジェクト型でエリアごとに活動をしています。賛助会員の開発事業者の人たちも「一緒にまちづくりをやりましょう。」と言ったときには「いいですね。」と言ってくださるものの、大規模なものを振りかざした途端、急に話ができなくな

ります。組織人だなと思って諦めるのも仕方ないですが、東京文化資源会議をやっているからこそ、ネットワーキングしながらその問題とどう向き合いたいと思っています。

庄司

たとえば秋葉原でいうと、いろいろ良いアイデアは出るけれど、やろうとすると商店会や警察との調整が大変だ、難しい、という話になりがちです。議論をしながら私がいつも思っているハックの一つは「私有地なら文句を言われないうね」というものです。たとえば秋葉原でしたら神田明神さんや大きなビルの屋上などは、比較的自由に新しいことに挑戦できる可能性を感じます。それから、秋葉原の中心地は歴史的にも移動していますし、別に今の中心地が秋葉原の中心でなくてもいいだろうと思っていまして、秋葉原周辺のやりやすいところで活動すればいいのではないかと考えています。

菊地

1回目の座談会と同様、ヴィラン（悪役）として振る舞わなければ、という勝手な使命感を持つているわけですが、みなで話し合った結果できたまちは、正直つまらないような気がします。この5年10年で聞く、民主的に開かれたプロセスを経た再開発の結果、みなが真似できるような素晴らしいモデルが生まれたかというところではない。

私は、半分本気、半分煽るために言いますと、まちづくりは、可能な限りいろいろなところに目配せができる権力者が進めてしまった方が早いと思っています。「観光客に向けたまちづくりを」と言う人たちが増長すると観光公害が発生し、「地域の伝統を守れ」という人が増長しすぎるとただの老害になるといったように、全てのステークホルダーはいきすぎると抵抗勢力化します。それぞれのステークホルダーをテーブルに載せて話し合えばいいわけですが、話し合えるような人たちではないまちなちも、たくさんあるわけです。

秋葉原はわりとそうで、たとえば「秋葉原が好きなおタク」と言えど、おタクにも複雑な派閥があるわけです。全員をオンテールにするのは無理ですから、ある程度目配せをして、ここだったら結果みんなにとって幸せになるよねという信念のある独裁者、広い意味

沢辺 でのアーバンデザイナーがやってしまう方が私は良い気がするのですが、いかがでしょうか。秋葉原の例でいえば、電気部品のまちからパソコンのまちになり、オタクのまちになるという変化は住民主導でそうなったわけではなく、自然発生的にそうなったからこそ混沌が生まれ、まちがおもしろくなったと言えそうです。そもそも、地域住民による丁寧な合意作りは必要なのか。確かに、みんなで合意形成して民主的な社会にしましょう、なんていうのは綺麗ごとにするのかもしれませんが。

「開発側・ジモト側が共創する場の「ディレクター」が再開発の鍵

宮崎

合意形成の話でいうと、最近、私のところへ地域の非常に重要な場所にマンションを建てたいというデベロッパーがいらして、「自分たちは、地域にとつてここが大事なことは分かっているけれど、良いプロジェクトにしたい。どうしたらいいか。」という相談を受けました。

このプロジェクトが大衆の投票で左右されてしまうと、絶対につまらなくなる。反対の急先鋒になりそうな人たちははじめに集めて、どうしたらいいかをオープンな場で議論しつつ、突拍子もない案は出来ませんと切っていく、これがやりたいならここは妥協できるよね、という整理を専門家がすべきだと思います。それが先ほどお話にあったやや独裁的な差配なのかもしれませんが、権力がある人でもセンスがない人だったりもするわけで、こういうことが本当にやりたいのならこういうことじゃないですか、といったような翻訳を誰かがすべきだと思います。行政側の用意するデザイン協議会が、それだけ生産的な場所を作って提供できるのならばそれでもいいと思います。

ただそのように地域とコミュニケーションを取ろうと思ってくれるデベロッパーがいると

いうのは、すごく希望になります。「持ち帰ります」とは言われましたが、できれば最初に急先鋒の人たちと一緒に議論し、ある種の事実をつくりたいと考えています。おもしろいプロジェクトにするためには差配をすべきで、その評価は差配者の責任になる。地元ですから、正直やりたくはないです。でもやらなければずっと不毛な戦いをしなければなら

坪田

ないため、ここで先鞭をつけることには意味があると思っています。

まさにおっしゃるとおりで、デベロッパーも揉めたくはないですし、悪いことをしたいわけでもありません。今までの、揉めたり上手くいかなかったりした実績をもとに、デベロッパー側も考えていますので、谷中なら宮崎さんのところに行けばいい、といったように、各まちの誰に仁義を切ればいいのか、自分達にとつて有益なアドバイスをくれる人は誰なのかを、デベロッパーは探しています。再開発はどこも同じでつまらないと言われていたことはデベロッパーも理解しているので、デベロッパーの中にも話を通じる人が必ずいます。通じ合える仲間探しをしながらお互いに腹を割って「ここまでは出来るけれど、ここからは無理だよな。」ということ調整していくことは、現実的にあり得るなと思いました。

宮崎

「そもそも、この土地をこの値段で買っているのだから、回収するためにここで稼がなければいけないことは分かりますよね」といった、事業を成り立たせるための前提を地元も理解した上で、「ちよつと北側の斜線を我慢してもらって削るから、その代わりこちらに容積を増やさせてあげてください」などという話をしたいです。

沢辺

テクニク的にいえば、反対の急先鋒をこちらに引き込むことは大切ですよ。マンションの理事会でいつも管理組合にクレームばかり言う人がいて、偶然その人が今年立候補してきて入ってもらったところ、1回目はすごく大変でした。ところが、積み重ねていくにつれて土俵が一緒になってきて、今は全然大変ではなくなっています。

そうすると、あらゆるまちに、地元の文化資源を尊重しつつ、開発者のビジネスを成り立

たせる差配者が必要だという結論になるでしょうか。

宮崎

炎上の矛先になる可能性が高いですから、地元ではあまりやりたくないのが本音で、「お金をもらうかどうか問題」もあります。お金をもらわないとやりたくないですけれど、「あいつ金もらってやっているらしい」みたいなことも、多分言われるだろうと思ったりします。いい方法があれば教えていただきたいのですが、設計は受けると下請けになり、デベロッパーの言い分を尊重しすぎる立場になるため、受けてはいけないと思っています。デベロッパーからお金を受け取りつつも、中立な立場になれる形で関与できるか、と思っています。行政だと景観審議会みたいなものでしょうか。

沢辺

かといって、行政が指名する「まちづくり応援隊」のようなものもちょっと違うと感じています。地元住民とデベロッパーとの対話をいとわず、生活も成り立たせながら果敢にチャレンジする若者をいかにつくっていくのか。それが課題のような気がします。

坪田

中島先生は、各ステークホルダーの中で非常にバランスを取られているように感じます。その辺りは、どのように考えてふるまわれているのでしょうか。

中島

矢面に立つことを覚悟することは意識しています。専門家という立場はありますが、極論としてどちらかに振り切るのではなく、この辺が落とし所ではないかと言わなければなりません。東京でもあちこちの現場に関わらせてもらっていますが、こっちの現場に行くとか再開発推進派だと思われ、あっちの現場にいくと再開発反対派だと思われるわけですが、それは仕方がないですし、そこでやっていくしかない。再開発が良いか悪いかという構造的な課題ももちろんありますが、この現場を今どうするかにどれだけきちんと向き合えるか、ということでしょうか理解してもらえるところはありません。そういう意味では、専門家としてのポリシーはどんどん薄まっていつている気がしますが、それでも構わないと思っています。

庄司

それでも評価されているということは、落としどころの見つけ方が上手だからだと思います。残したいと言われているものをある部分残せるやり方があり、経済性も大事だよねというときに、きちんと経済的に回るような落とし方をされていらっしゃるのだと思います。テクニックのような話になりますが、私たちが引き出しをたくさん持てると、まさに良いものを残していけるのではないかと思います。落としどころを探るというのは妥協しているように見えて、すごく知恵が詰まっているように感じますので、もっとお聞きしたいです。

「壊したら元に戻せないものが「文化資源」？」

三文字

この議論の前に、みんながテーブルにつこうが独裁者がいようが変わらないテーゼがあると私は思っているんです。「一度壊すと作り直せないものは、残しておいた方がいい」というものです。レベルは大小ありますが、本郷では、登録有形文化財でもポンとマンションになろうとしています。残すべきか否かについて議論する前に、「文化資源は一度壊すとなくなるのだから、残す方が価値がある」というテーゼを、全員で共有してもよいのではないのでしょうか。東京文化資源会議として、そう断言してもいいと思いますし、そこから始まる議論もあると思っています。

台湾の台北市では文化財保全に関する容積率の移転制度などをつくっていたりします。制度ができて20〜30年経ち、結果的にそれが観光資源になってポジティブな面がどんどん出てくると、今やこうしたテーゼも当たり前のことになっています。手法はさておき、そもそ文化資源は他のまちづくりのトピックとは異なり、国民や市民としてまず前提として守るべきという姿勢を打ち出せないものか、そういうものをテーゼとして宣言するような組織体に、東京文化資源会議がなれないものか、と思いながら聞いていました。

その上で、全ての建物をそのまま残すわけにはいきません。だからこそ、この7、8年、銭湯や、戦前の木造家屋を残すべきか、残すべきだとしてどう周りと一緒にやっていくのかを模索する際、シンプルに、それが壊れて新しいものになったときに、新しいものは壊したものの以上の価値を持ち得るか否かを考えています。

価値というものは抽象的ですし、必ずしも新しいものがダメだとは思っていません。新築マンションが50年後、壊した銭湯以上の価値を持つ地域資源・文化資源になるのであれば構わないと思います。ただ、現在の新築マンションには、そのよすがが見当たりません。宮崎さんが今度手掛けられる可能性のあるまちの重要な場所も、地域の人はそういう見方をしていくのだろうと思っています。このような大前提としての残す・残さないの価値判断の話と、実際のテクニクの話とは、別の次元のものとして議論できるように思いました。

庄司

「文化財を残した方が良い」論でいいですよ、海外の都市には、何百年も前の建物が全く別の用途に使われているなど、文化財がきちんと稼げるものになっている事例が結構あります。そういう手法を私たちがいくつも用意してハックでもいいですし、正面からきちんと残して稼げるようにしてもいいですし、結果的に残したいものが残るというようなことができないかと思っています。

宮崎

HAGISOは、戦後の木造アパートなので文化財には全くなっていませんし、私はむしろ壊した方がよいと思われているような戦後の建物ばかり直しているわけですが、萩荘（現HAGISO）を残してみたら、森田芳光監督の40年くらい前の処女作「の・ようなもの」という映画の冒頭で、主人公が住んでいる家として使われていたことが後から分かりました。谷中が舞台の映画ですが、そこに映っているもので今でも残っているのは萩荘くらい。都市の記憶や文化的な記憶というものは、それだけで財産であると感じました。基

本的に、私は全て文化資源だと考えています。

菊地

秋葉原の話から今の話につながることは、「文化資源として何を想定するか」だと思っています。みなさんが今想定している「文化資源」は、歴史ある建物や地域の思い出、あるいは生活文化のようなものだと思いますが、秋葉原を見ると、あるいは秋葉原と言わず若者文化を主語にすると、コンテンツに文化資源がどんどん寄っていています。そうすると、そこにマーケティング原理や市場原理的な最適化、最近ではさらにインターネットが絡んできてアテンション・エコノミーなどが生じるわけです。そういったある種の資本的なものとまちづくりは真逆のベクトルにあると思っています。そういう状況下で時が経ち、私たちが残したい文化資源にそういった市場の色がどんどんついていった時に、間に立つ人に求められる資質なども変わってくるのだろうと思います。

今の「みんなの共通合意があるから」という状況は、ぬるいゲームだと思っています。市場的には「それは別にそんなだよな」となってきたら、なおかつそこに著作権等の権利が絡んできたときに、「いや、でもこれは残しましょうよ」という議論が出てくると、さらに一段複雑な戦い方を間に立つ人はしなければならなくなります。

合意に関しても、今までは来る人も含めて地域の人が対象だったものが、たとえば海外に住んでいる遠方のファンが「これは残すべきです」と言っていることをどう汲み取るかといった話に今後進んでいくのだろうと思っています。

中島さんは間に立つ識者として、開かれたバランスの取れた非常に良い権力者として振る舞っていらっしゃるわけですが、これからますます大変になっていく中で、今後もそのモデルで成立していくのかなというところに疑問があります。

「ジモトの人、ジモトの暮らしを含めて」文化資源

宮崎

森田監督の映画の話も、無形の文化資源が物と関係のないコンテンツかハードかという二元論になってしまうと、不毛だと感じます。必ずハードにそのコンテンツは紐づいているわけで、記憶というものがある種のコンテンツだと思っています。物や空間に宿っているたとえば植木鉢の置き方という習慣的な振る舞いや、洗濯物の干し方というものも文化資源で、それができる環境が担保されているからその行為が守られているということでもあります。

谷中に路地園芸が多いのは、土地の境界線がはっきりしないことと借地が多いという環境に基づいていて、境界線がぼやっとするために道路に置いてしまったり、逆に公園の植栽を普通の人が手にしてしまったりということが起こるわけです。単純にコンテンツかハードかの問題ではなくて、それが宿ったハードであり、そのコンテンツをアコードする環境をどう残していくかという問題なのではないかと思っています。逆にハードだけが残ったとしても博物館的に保存されるだけになってしまいますので、そういう意味に文化資源というのを捉えるべきではないかと思いました。

中島

文化資源の話で先ほどコンテンツとハードという話がありましたが、スペースとしてのまちはなく、そこに人がいて、そこにそのものが存在していることを価値として捉えていることが、東京文化資源会議の重要な部分だと感じています。そこをどう次につなげていくか、極論するとコンテンツでもあるというお話もありましたが、そこに場があるということが大切に、場があるからこそ、その地域の「らしさ」みたいなものが生まれるわけで、それをどう大事にしていくかということだと思います。

宮崎さんの軒先園芸の話なども、「らしさ」だとか、谷中という場がそれをそうさせてい

ることをどう説明できるか、そこにどう価値を共有しているか、といったことが文化資源

としてはすごく大事で、そこを総体として掴まえてほしいですし、育みたい、大事にしたいということがここで言っているまちづくりだと思っています。開発か開発でないか、残すか残さないかということよりも、東京には魅力的な界限がありその場があるということを、私はアプローチとして大事にしたいと思っています。

三文字

ここまで議論を聞いてきて私の脳内に浮かぶのは台湾の夜市で、あれは限りなくハードとソフトの中間にあるものだと思います。一個一個の屋台は別に大したものでもなく、それが集まることによって組織化・自立化し、まちの中に出現して今は立派な観光資源になっていますが、文化資源とはそういうものだったのではないかと思っています。

「当事者意識を持つオペレーターが、まちの価値を高める」

沢辺

ここからは、文化資源に基づいたまちづくり・まちおこしは可能か、そしてそれはどのようなイメージか、ということに議論をシフトしていきたいと思っています。

菊地

「全員合意モデル」があったときに、庄司さんから「私有地なら自由」というお話がありました。最近のIT系の話で言いますと、国立科学博物館のクラウドファンディングに見られるように、ファンからお金を集めたりする術が出てきています。文化資源に基づいたまちづくり・まちおこしは可能ですし大事ですが、それをまち全体で合意するというよりは、細かなパトロンがそれぞれ頑張って何かを保存するような新しいモデルが今後出てくると思います。最近では、この建物を残したいというクラウドファンディングがされたりしますし、そういう方向性は秋葉原の事例ともつながりが深いと思いました。

庄司

菊地さんと同じようなことを考えていまして、外国から「この雑居ビルは大事です。」と

いう人が現れたときに、「じゃあ支えてほしい。一緒にやろうよ」と言えるようになってきているのが強みでもあり、おもしろいところだと思っています。ネタがコンテンツ化しているところもあるのかもしれませんが、秋葉原は本当にそうで、いわゆる100年、200年という文化財は全くないわけですが、雑居ビルやゲームセンターのようなものであっても、地球の裏側から「こういうものは大事だ。」と言ってくる人たちがいます。みんなの概念の中にしかない、ネオンがキラキラする映画で描かれているようなサイバーパンクのまちが好きだという人たちと、土地から離れてうまく回す仕組みを作ることとは、インターネットで可能になってきています。

三文字

商店会などに入っているいろいろ話を聞いている中で、「なるほど」と強く感じるのは、商店会の商店を運営されている方のご子息のように、そのまちの経営者といえますか、オペレーターの方のお話だったりします。宮崎さんが谷中でされている活動に説得力を感じるのは、宮崎さんの会社自身が谷中でいろいろなお店を実際に経営されていて、オペレーターの立場を担われているからだと思います。外からのオペレーターであったとしても、生え抜きのオペレーターだったとしても、秋葉原のコンテンツの担い手であったとしても、台湾の夜市の一個一個の店主であったとしても、結局その価値を作り上げる人たちは、設計者でもアーバンデザイナーでも学者者でも、設計者でもなく、その後数十年、そのまちやそのコンテンツを作り続ける人だと思っています。その人をどう増やして醸成していくかが肝になるのかなと思ってお話を聞いていました。地球の裏側からお金を集めるという話がありましたけれども、地球の裏側にいる人たちに秋葉原のコンテンツ醸成を実施するオペレーターになってももらってもいいですし、東京も都心の商店街に地方から順繰りでお店を出してもらおうのもいいかもしれません。いかに他所の人とお金をオペレーター側に持ってくるか、それが大事な気がしています。

坪田

開発者も、いかにまちの人たちにその想いを引き渡していくかは重要だと思っています。最近、問屋街の町会に新しいメンバーを入れようとしたところ、現メンバーは「入ってほしい」と言いながら抵抗感を感じているようでした。落としどころとして、新しいメンバーは並行して別に活動していった方が良さのではという話になりました。無理に一緒にしなくても、このまちに興味がある人が並走しているような、秋葉原のコンテンツごと・興味ごとに人が集まっているような状況が良いかもしれないと思っています。

旧来からいらっしゃる人たちも、いつかのタイミングで東京にやってきた方々。今まで神田なり日本橋にいられたのは、良い意味で変化しつつ乗り切ってこられたからだと思います。新人類が入ってきたときに、「これはこっちにのった方がいいな。取り入れた方がいいな」と思えば、自分が必要だと感じたタイミングで、自分は譲っていない風を装いながら、うまくチューニングするだろうと思っています。まちを変えていくときに、無理矢理統合するよりは、昔から地元にいる人たちにあまり批判的にならず、新しい人を並走させるやり方のほうがいいと感じています。

新しい人がまちをオペレーションしていく波をもっと走らせると、気付いたら役割分担ができていたり、バトンタッチができていたりするかもしれません。町会だけがまちを仕切るのではなくて、並走させていくことがもっとできるいいと思っています。

三文字

庄司

先入観で発言しますが、デベロッパーと呼ばれる人たちも、オペレーターとしてまちの価値を高めていこうとしているイメージを持たれないと、やはり少し反発がくる気がします。「つくって売って、そこで終わりでしょう」と見られてしまうと、私などは「どうなの」と思ってしまう。地権者は長くコミットして、土地の価値を高めるという立場です。

確かに、URが問屋街の小さな土地を6つ購入して地権者となったところ、まちの人から「おお、仲間だ」と言われ、私たちに対する態度が急変しました。

仕事をする中で、どうしてまちの再生というのは、有能な個人のもでしか成立しないのだろうという悩みがあります。個人の手法をマニュアル化した途端につまらなくなるのかもしれないですが、組織でもどうやったらまちが再生でき、変化をデザインできるのか、そんなことを考えながら神田や日本橋、新橋で取り組んでいます。この床余りの時代に、いつか民間デベロッパーも真似したくなるようなまちの再生手法をつくりたいという思いがあります。

先ほどの、来るかもしれないプロジェクトの話聞いた時、一つだけ「全部分譲にせず、1階の店舗は持ち続けて賃貸にしてくれませんか」というお願いをしました。「できなくはない」とのお返事でしたが、全て持つというのは相当な資本がなければできませんので、「上は売ってもいいけれど1階部分だけは持つて建物の長期的な価値にコミットしてほしい」ということはお伝えしました。嫌がられるとは思いますが、そういう一手だけでも、デベロッパー側にまちのオペレーターとしての当事者意識が出てくると思います。

私が肌感覚として良好に付き合えているまちは、地元企業や行政の人たちも、「中島はおそらくこのプロジェクトの後も、きつとこの地に関わっているだろう」と思ってくれているまちです。「次は、これやってみたらよさそうですね」ということが言え、「それをやるためにどうしたらいいか」という話が継続的にできることが、地域との信頼関係につながっている気がします。資産を持ち続けるということと同じだけ、継続的な信頼関係をどうまちの中でつくっていくかは重要です。

二「文化資源を活用したまちづくり」を、改めて考える

吉見さんのジモト論とも重なる話が出てきたと思いますが、最後は、今日のテーマである「東京の広い意味での文化資源を活用したまちづくり」についてご発言いただきたいと思っています。

私は文化資源原理主義者といいますか、文化資源を全く使わないまちづくりなどないだろうと思っています。だからこそ、「資源のタネ」のようなものを、まちづくりに活用できる資源へと変えることが大事だと思います。1年前に壊された本郷の魚屋の調査で基礎に潜ったところ、菊坂の下に小石川から不忍池に流れる下水の遺構が出てきました。地域に詳しい郷土史家が本郷にも二人いらして、この遺構を現存する最後のものと指摘していました。彼らはFacebookに昔と今の写真をたくさんあげていますが、彼らが高い熱量を持つてまとめている資料は、まだ文化資源ではありません。蓄積されている知識の量はすごいですが資源化されていない。それらを若い世代がまちづくりのために使うためにはなにかしらの翻訳が必要で、それが資源化するということだと思っています。

本やネットに載っている情報はたくさんありますが、さらに、もう一步が問われるのだろうと思います。私たちも、最初の頃はワークショップをしたり、それを同人誌にして今までは異なる層のところへ売りに行ったりもしました。ネットの番組も作りまし、提言を持って行ったりもしました。最近はまだ歩きを何回かしましたけれども、「文化資源がありますからみなさん見てください」ではなく、どうやってそれを届けてアクションへつなげるかが問われている気がします。

意外にみんな、文化資源と一口「資源」の意味をあまり考えていなかったりします。ただそこにあるだけでは資源ではなくて、資源であるためにはそれが組織化されていたり、

リユースできたり、ある種の条件がないといけない。国会図書館にただ本を置いておくだけでは資源とは言えなくて、それが閲覧できたり、本を使ったり見に行く仕組みや閲覧室とがセットになることによって初めて資源になるという理解です。本自体は資源の素のようなもので、資源と言えるようになるためには、活用できるセットにならなければいけないということですね。

菊地

文化資源は、何のための資源かというところが重要だと思います。個人ではなく集団として記憶を継承したり、そのものを通じて自分達が世界を解釈できるための資源として捉えるのが重要ではないかと思っています。それは、先ほど宮崎さんがおっしゃっていた文化の記憶や都市の記憶ということであって、個人の記憶ではないわけです。そこに関わる人たちの集合的な記憶なのだと思います。

ただ、難しいのは、社会が発展すればするほど集団が細分化されてしまい、みんなの規模がバラバラになりその範囲が狭くなっていくからです。その点、先ほど中島先生のお話にあった土地土地の「風土」というものは、みんなが同じものを経験するため、とても良いと思います。

この話に関連して言うと、最近デベロッパさんがよく再開発ビル内で展開する「横丁ビジネス」は非常に好ましくなくと思っています。横丁をビル内に設置する論理は、「賑わい」の創出にある訳でしょうが、その賑わいに包摂される対象が極めて限定的であり、ビルやその地域の人々にとっての集合的な記憶の場所にはなっていないわけです。

他方で、先ほど、坪田さんがご紹介された、新しい人も昔の人も何かやりながら少しずつ接点ができればいいというURさんの取り組みは、みんなの集合を再度ゆるやかに作ってあげようというものだと思いますので、いい試みだと思います。

最後に、1つ提案をしたいと思います。最近、「都市型フェス」と呼ばれる複合イベント

が世界各国で行なわれています。日本だと、札幌のNoMapsや神戸の078KOBÉ、福岡の明星和楽などが有名です。私が先日、台湾の高雄市で見てきたのはTXXCという科学技術×文化のイベントでした。TXXCでは、市内の1か所の会場でイベントを行なうのではなく、高雄市中を使いながら同時多発的に複数の場所で音楽ライブやカンファレンス、最新の技術体験などの催し物を開催しているというのがポイントでした。東京文化資源会議でも、「東京文化資源フェス」を文化資源区内のいろいろな場所で同時多発的に行なうことにより、まちづくりに巻き込む人を増やせるのではないかと考えています。

中島

東京文化資源会議というグループに参加させていただき、私自身はすごく楽しく感じています。文化資源と都市の中でいろいろな発見があること、センス・オブ・ワンダーといいますか、能動的に好奇心が掻き立てられることが継続しているということ、いろいろな人たちがいてお祭りのような機会を用意したり、そういう場でつながっていったりすること、これらがこの活動の一番大事なところのように思っています。

「文化資源を活用したまちづくり」について、まちの中で好奇心が掻き立てられるのはどういう場面かと考えたときに、宮崎さんはまちやどのお話をする中で「見立てる」という言葉をお使いになりました。文化資源を利用するときの最初の入り口として、それを何かに「見立てる」という行為は、非常に大事だと思いました。「見立て」ができる、それをどうするかという次のステップへつながっていくといいますが、それによって何かワクワクしたりすとか、これおもしろいなと思うことが人の腰を上げたりすとか、何かやってみようと思うところにつながっていくように思います。

宮崎

「見立て」は、複層化していくべきだと思っています。あるまちが誰か一人のシナリオで見立てられるほど窮屈なことはないと思っています。それが無数にあることがまちや地

域のおもしろさであり、素晴らしさだと思っています。空間はあるけどもそれを無数に解
釈できる場所がおもしろい。

資源という意味では生データとしてすでに地域というものがかなりの情報を持っています。
そこを整理して情報化することも重要だと思えますが、抽象化されることにより生データ
が持っている雑音が削がれる可能性もありますから、やはり生データは生データであって
ほしいと思うわけです。

それをいかに私たちが毎回こう感じながらできるフィールドであり続けてもらうかという
のが大事で、そういう意味で、「文化資源を活用したまちづくり」というのは少し違和感
があります。達成したい恣意的なまちづくりがあるかのごとく、それに対して文化資源を
活用するという打算的な関係になるのは、すごく嫌です。

それは日常的に培っていくべきものであり、誰かの恣意的な見立てによる達成すべきまち
づくり、というものに私は違和感を持ちます。自分の知らないまちの姿が数えきれないほ
どあることの素晴らしさですとか、星の数だけまちの姿があるということにいつもグツと
きている感じがします。ですので、逆に言うといくらでも楽しめると思っています。まち
がそういう場所でい続けてくれるために、自分がどんなアクションをすればいいのか、そ
ういうことをいつも考えながら行動しています。

一生き生きとしたまちは、楽しんでいる人間がつくりだす

庄司

まずは、まちがイキイキとし続けていくことが大事で、そのときに文化資源と言われてい
るものが活かされていると良いと思います。おもしろいところはたくさんありますし、新
しくゼロから壊して作るというよりも、今あるものをいろいろと引き出して楽しめたらいい。

い。

そういう意味で、私の中では、三文字さんの「オペレーションが大事だ」という言葉が記
憶に残りました。まちを活性化していくためのオペレーションの引き出しが、オリンピック
だけというのはつまらない。他にもいろいろあるでしょうと。菊地さんがおっしゃって
いた都市型フェスでもいいですし、とはいえ、どこもかしこも都市型フェスになったとし
たならば、それはそれでつまらないわけです。様々なやり方をいろいろな大きさ、方向性
で作っていけるオペレーションの落としどころの手法を、私たちが豊かにしていけたらいい。

住民だけではなく、そのまちを好きな人や地球の裏側の人、地方の人たちをうまく動員し
てつないでいき、新しいやり方をたくさん作っていけたら、きっと東京もおもしろいまち
であり続けるのではないかと思います。

三文字

文化資源によるまちづくりが20年進んでいると思われる台湾を見ていても、実は同じよう
に行き詰まっていると耳にします。いろいろな文化資源がリノベーションされているもの
の、結局、どこもカフェやアーティスト・イン・レジデンス、ギャラリーになっている。
いろいろな新しい動きがあるにせよ、この次、私たちがワクワクできるものは何だろうと
いうことを、私自身見失いかけているのかもしれない。

本郷の文化資源関係の活動も、「負け戦でどうしよう」とネガティブになることは多くて、
だからこそ菊地さんがおっしゃっていた都市型フェスのように楽しむということ、宮崎さ
んが今でも楽しみながら活動されていることに改めて「そうだよな」と思いました。もっ
とポジティブに、ポップに関われるテーマではないかと思えます。普通にしていると、な
んとなく右肩下がりという風潮をどう打開できるのか、私たち世代やもっと下の世代で考
えて発信していかなければいけないと思いました。

みなさんがどう評価されているかは分かりませんが、渋谷駅周辺の再開発はおもしろくない、宮下公園の上に公園を作ったところで何になるのだろうと感じています。なぎ倒してはいるものの、相変わらず渋谷に人は集まっているわけで、人集めという意味でも活用という意味でも失敗はしていない。このような現状の中、文化資源でそれに対抗させたとしても、本当に価値があるのか、勝てるのか、ということすら考えることがありまして、もう一度そこから退却し、再出発するくらいの勢いが本当は必要なのかもしれません。

今のMIYASHITA PARKは若者にとっては思い出をつくる場所であり、彼らにとってはあそこが一番楽しかった渋谷の記憶になりつつあるのだと思います。ハードのつくり替えが使命である法人であっても、楽しい記憶を重ねられる場を生み出していけたらと思います。

発行 ● 東京文化資源会議

会長 吉見俊哉（國學院大学教授）

事務局長 柳与志夫（東京大学特任教授）

発行日 ● 二〇二四年五月五日（日）

発行所 ● 〒一一・〇〇〇五

台東区上野二・一一・一 藤井ビル三階

電話 ○三・五二四四・五四五〇

<https://tcha.jp/>

20240505 01.01 (2000)

東京からジモトをつくる。

東京文化資源会議●座談会記録集 二〇二四 〇五